

I. ようこそ

- A. おはよう！オハイヨゴザイマス！。皆さん、7月4日の週末を楽しく過ごせたことを願っている。昨日は一日中ほとんど雨が降っていたが、それぞれの場所から花火を少しは眺めることができたことを願っている。
1. 初めでお越しの方や、オンラインで視聴されている皆さん、ようこそ。
- B. 話を進める前に、小学生の子供たちを日曜学校の教室へ送り出そう。
1. (第2礼拝：聖書英語クラスも同様)
- C. 子供たちが退場する間、残りの皆さんは聖書を開き、ヨハネによる福音書第6章の箇所を開いてほしい。
- D. 先週、私は「天からのパン」と題した教えを始め、これが少なくとも2回にわたる学びの第1部になることをお伝えした。
1. 先週は22節から40節までを取り上げ、「天からのパンをめぐる対話」について詳しく学んだ。
- a. この対話では、イエスとユダヤ人たちの間で激しいやり取りが繰り返された。先週触れたように、このユダヤ人のグループの中には、「五千人の給食」として知られる奇跡的な出来事を目の当たりにし、その恵みを分かち合った者たちも含まれていた。
- i. 今日の聖書の箇所から分かるように、このグループには宗教指導者たちも含まれていた。しかし、それについては後で触れることにしよう。
- b. このユダヤ人の集団はイエスを求めているが、その動機は間違っていた。知恵や霊的な理解を求めてイエスに近づくのではなく、彼らは単にイエスから何を得られるかという期待だけでイエスを求めていたのだ。
- c. 彼らはただただ、タダで何かをもらおうとしていたのだ。前日にパンと魚のごちそうをいただいたばかりだった彼らは、イエスがまた自分たちを養ってくれるかどうか確かめたかった。ただもう一度、あるいは数回だけではない。彼らは、イエスに一生涯養ってほしいと願っていたのだ。
- d. 彼らはイエスに問いかけ、しるしを求めた。そして、先祖たちが荒野をさまよっていた40年間、毎日食べ物を与えられていたことを強調した。
- e. 彼らはイエスにそのようなしるしを見せてほしいと望み、一生涯食べさせ続けてほしいと願っていた。そうすれば、二度と食べ物の心配をしなくて済むからだ。そして彼らは要するにこう言ったのだ。「もしそれができるなら、もしモーセが成し遂げたことに匹敵するのなら、私たちはあなたを信じ、あなたに従う」と。
- f. しかし、イエスは彼らの本心を看破していた。イエスは、天からの真のパンについての彼らの理解に疑問を投げかけた。そして、自分が天から降りてきた「いのちのパン」であり、彼らの先祖が荒野で食べたパンよりもはるかに偉大なものを彼らに与えようとしているのだと、はっきりと宣言したのだ。
- g. イエスが差し出そうとしていたパンは、永遠の命をもたらすものだった。

h. 37～40節で、イエスは私たちの救いに関わる父の御心について語った。

- i. 39節では、神が私たちを選び、イエスに与えてくださったという神の主権について、また、イエスは自分に与えられた者を一人も失わないことについて語った。(ヨハネ6:39)
- ii. しかし、イエスは人間の責任についても語り、次の40節では、御子を見て彼を信じる者は誰でも永遠の命を得るのだと述べた。(ヨハネ6:40)

i. 先週の学びはそこで中断した。しかし、今朝取り上げる箇所では、その対話が続いている。

2. 今週は、特に「天からのパンを受けること」に焦点を当てた41節から59節を取り上げる。
3. 皆さんも、すでにヨハネによる福音書第6章を開いてくれていることを願う。もしそうなら、神と神の聖なる御言葉を称えるために、皆で立ち上がってほしい。
4. 私は本文全体を読み上げ、その後、学びの時間を祈るつもりだ。私が自分の聖書から読み上げるので、皆も自分の聖書でできるだけ追いかけてほしい。
5. その日、イエスと群衆との対話は、第6章41節で次のように続く。ヨハネはこう記している……(朗読と応答)

II. 導入と概要

A. 先ほど読んだ箇所からも分かるように、これは先週から始まったイエスと群衆との対話の続きである。

1. しかし、この箇所から分かるように、イエスが話していたのは、前日に食事を与えた人々のグループではありませんでした。その集団の中には、宗教指導者たちも混じっていたのです。
- a. そう分かるのは、本文の最後で、イエスが語ったこれらの言葉が、カペナウムの会堂で行われた教えの一部であったと記されているからだ。
- b. 当時、会堂では有名なラビを招き、巻物を広げ、聖書を読み上げ、その内容を解説してもらうのが慣例だった。どうやらイエスはこの時、そのような機会を与えられていたようだ。
- i. この機会は、宗教当局、すなわち会堂の長や、会堂を監督する長老たちによってのみ与えられるものであった。
- c. イエスが語りかけている人々は、イエスの教えを聞くために会堂に集まった人々の混合集団であると推測しても差し支えないだろう。その集団は、宗教指導者、地元の会堂の信徒、そして前日に食事を振る舞われた人々で構成されていたはずだ。
2. 舞台が会堂であるという記述があるだけでなく、弟子ヨハネが「ユダヤ人」という用語を用いている点も挙げられる。
- a. ヨハネは福音書全体を通じて、宗教当局者や宗教指導者を単に「ユダヤ人」と呼んでいる。多くの場合

、ヨハネはイエスとその地上の働きに積極的に反対した宗教的エリート層を指す際、この言葉を選んでいる。

- b. そして、本テキストの冒頭（41節）と52節において、ヨハネは再びこの「ユダヤ人たち」という表現を用いて、イエスが誰に語りかけていたのかを特定している。
- c. これらの言及より前の箇所を読み返してみると、ヨハネが五千人の給食に関わった集団を「ユダヤ人」と呼んだことは一度もないことが分かる。彼は単に彼らを「人々」、「大群衆」、「あの男たち」と呼んでおり、「ユダヤ人」とは決して呼んでいない。彼がそう呼び始めたのは、今朝取り上げるこの箇所からである。
- d. また、この箇所全体を通して、これらのユダヤ人たちはイエスに直接話しかけていないことも分かるだろう。彼らはただ不平を漏らし、互いに争っているだけであり、イエスはそれを指摘しているのだ。
- e. 先週、イエスが語りかけていた人々は、様々な質問を投げかけ、イエスを求めていた。その動機は間違っていたとはいえ、それでも彼らはイエスと関わっていたのだ。
- f. 今朝取り上げる箇所に登場するユダヤ人たちは、イエスと全く関わろうとしない。彼らは不平を漏らし、ぶつぶつと文句を言い、イエスについて不満を漏らすが、イエスと向き合おうとはしない。彼らは互いに言い争うが、やはりイエスとは関わろうとしないのだ。
- g. 文脈から判断すると、イエスは先週の箇所とは異なる群衆の一部に語りかけていると考えられる。

- 3. さて、今日の箇所でイエスは以前と同じようなことをいくつか語っているが、この時、イエスが群衆の別のグループに語りかけている可能性が高いことを考えれば、それは理にかなっている。
- 4. イエスの焦点は今、宗教指導者たちに向けられており、彼らや、イエスが誰であり、どこから来たのかという彼らの先入観や固定観念に異議を唱えているのだ。

B. 聖書の要約を好む人のために、この箇所を二つの簡単なセクションに分けていく。

- 1. 最初のセクションは、41節から51節までの「ユダヤ人たちの不平」について扱う。そして2番目のセクションは、52節から本文の終わりである59節までの「ユダヤ人たちの論争」について扱う。

C. 「ユダヤ人たちの不平」を扱うこの最初のセクションに入るにあたり、冒頭の節をもう一度見てみよう。私と一緒に41節と42節をもう一度見てほしい。

III. ヨハネによる福音書 6:41-42；不平を言う理由

A. ここ、41節と42節には、ユダヤ人、すなわち宗教指導者たちがなぜイエスを非難していたのか、その理由が記されている。それは、イエスが「わたしは天から降ってきたパンである」と言われたからである。

- 1. つまり、イエスは明らかに彼らの耳に届くようにこの言葉を語ったのだ。イエスが自分を探し求めてきた群衆に語りかけ、自分が「いのちのパン」であり、天から下ってきたことを告げると、それが宗教指導者たちの注目を集め、彼らはそれについて不平を言い始めたのである。

- 2. この「不平を言った」という言葉は、他の現代英語の訳では「つぶやいた」や「ぶつぶつ言った」と訳されている。
- 3. このギリシヤ語は、低く不明瞭な声でつぶやいたり呟いたりする際に発する音に由来している。それは、何かについて小声で不平を言ったり文句を言ったりすること、あるいは自分自身やすぐそばにいる人たちに低く呟くような意味合いを含んでいる。
- 4. これは彼らが互いの間で密かに行っていたことであり、イエスに対して公然と行っていたわけではない。

B. ユダヤ人たちは、イエスが「天から下されたパン」であると主張したことを快く思わなかった。なぜなら、それはイエスが天の起源を持つという主張に他ならなかったからだ。

- 1. それは、イエスが天から来た者であり、神性を持つ者であることを主張するものであった。
 - a. イエスは27節で、ご自身を「人の子」（メシアの称号）と呼び、父なる神がご自身に御印を押されたことについて語った。（ヨハネ6:27）
 - b. 32節で、イエスは父を「わたしの父」と呼び、自分が単に「人の子」であるだけでなく、まさに「神の子」でもあると主張した。（ヨハネ6:32）
- 2. 宗教指導者たちは、イエスとその地上の家族のことを知っていた。彼らにとってイエスは、皆知っている「大工の息子」に過ぎなかったため、イエスを「人の子」や「神の子」として捉えることはできなかった。彼らは言った。「この人は、私たちが父と母を知っているヨセフの息子、イエスではないか。」
- 3. イエスが天から来られ、神性を持つという概念や考えは、彼らが受け入れられる範囲をはるかに超えていた。彼らは、皆知っている大工の息子以外の何者かとしてイエスを考えることができなかったのだ。
- 4. そこで、彼らはそのことについて互いにささやき合った。彼らは小声でイエスとその主張について不平を漏らし、イエスが天から来たというその大胆な主張について、互いにぶつぶつと文句を言い合った。

C. そして残念なことに、今日でも同じ問題を抱えている人は多い。イエスを見て、彼が神のひとり子であり、神性を持つ永遠に存在する方であると信じることができない人々だ。

- 1. モルモン教や末日聖徒イエス・キリスト教会のように、イエスは悪魔ルシファーの霊の兄弟だと主張する者もいる。
- 2. また、ものみの塔協会のエホバの証人のような人々は、イエスが大天使ミカエルであると主張し、イエスが肉となった全能の神であることを否定している。
- 3. ヒンドゥー教は、イエスが神のアヴァターであると教えている。多くの仏教徒は、イエスが他者を助けるための慈悲から、生まれ変わることを選んだ、高度に進化した霊的存在であると信じている。
- 4. イエスは単なる優れた道徳の教師に過ぎないと主張する者もいれば、人道主義者として他者を助けた、極めて慈善心豊かな人物に過ぎないと主張する者もいる。

5. イスラム教徒は、イエスを預言者と信じ、メシアと呼ぶことさえあるが、イエスが神の子であり、神性を持つという考えは完全に否定している。
6. また、イエスを単に、弱く、自力で生きていけない人々が作り出した「支え」に過ぎないと考える者もいる。彼らはイエスの歴史的な実在さえ否定し、イエスは単なる神話であり、そもそも存在したこともないと主張する。
7. ご覧の通り、イエスが誰であり、どこから来たのかについては、実に多くの考えや見解がある。しかし、私たちは迷う必要はない。イエスは私たちにそれをはっきりと示してくれたのだ。
 - a. イエスは、ご自身が天から来られたと語っている。「人の子」であり、神の子であると語っているのだ。その主張は大胆であり、十分に記録され、広く理解されていた。まさにこの理由ゆえに、イエスは最終的に宗教指導者たちによって十字架にかけられたのである。イエスはご自身を神と同等であると主張したからだ。
 - b. ヨハネの福音書の後半で、ユダヤ人、すなわち宗教指導者たちは、ポンティオ・ピラトに対して、「私たちには律法があり、その律法によれば、彼は死ぬべきである。彼は自分を神の子だと名乗ったからだ」と答えることになる（ヨハネ19:7）。
 - c. イエスの主張は極めて明確だった。それこそが、宗教指導者たちにイエスを十字架につけるよう駆り立てたのである。イエスが神の子ではなかった、あるいは神の子であると主張したことはなかったと示唆しようとするのは、聖書の明確な現実と教えを無視することになる。
 - d. イエスは、肉となった全能の神である。イエスは、三位一体の第二位格である。父なる神、子なる神、聖霊なる神——これら三者は神性において等しく、しかし位格においてはそれぞれ唯一無二である。
8. ユダヤ人たちは、イエスについてこれ信じることをどうしても受け入れられなかった。しかし、あなたはどうか。イエスがご自身が語った通りの方であると信じているか。イエスがご自身が語った場所から来られたと信じているか。イエスが人となった神であり、「人の子」とであると同時に「神の子」であり、100%人間でありながら100%神でもあると信じているか。これこそが聖書の教えだ。これとは異なることを示唆することは、神の御言葉が明確に教えていることに矛盾することになる。
- D. そこで、ユダヤ人たちは互いに不平を漏らし、イエスと、イエスが天から来たという主張について、小声で文句を言った。しかし、43～51節で、イエスが彼らの不平にどのように応答しているかを見てみよう。

IV. ヨハネによる福音書6章43～51節：不平への応答

- A. イエスはまず、宗教指導者たちに対して命令を下す。彼らに、互いに不平を言うのをやめるよう命じたのだ。
 1. 彼らは小声で呟いており、イエスの前で声に出して言っていたわけではないが、イエスは彼らが何を言い、何を考えているかを正確に知っていた。
 2. イエスは彼らに、不平を言うのをやめ、自分についてつぶやいたり不平を漏らしたりするのをやめるよう命じたのだ。
- B. 44節で、イエスは私たちの救いにおける神の主権についてさらに語っている。以前、イエスは37節の前半で、「父がわたしに与えてくださる者は、みな、わたしのところに来る」と述べていた。（ヨハ

1. イエスのもとに来るということは、神ご自身が始められることである。それは、あなたや私が自らの力で求めるようなことではない。
2. 聖書は、私たちの中に善い者は一人もおらず、自分の力や意志によって神を求める者は誰もいないと証している。それは神の御業なのだ。
 - a. 詩篇14篇にはこう記されている。「愚かな者は心の中で、『神などいない』と言う。彼らは墮落し、忌まわしい行いをした。善を行う者は一人もいない。主は天から人の子らを見下ろし、理解する者、神を求める者がいるかどうかを見られる。彼らは皆、道を外れ、共に墮落した。善を行う者は一人もいない。いや、一人もいない。」（詩篇14:1-3）
 - b. パウロはローマ人への手紙第3章10～12節で、まさにこれらの聖句を引用している。
私たち自身では、神を求めず、善を行うこともない。私たちは皆墮落しており、皆罪の中に生まれている。私たちに、自分自身の力では克服できない罪深い性質がある。
 - c. 神が働かなければならない。神が介入し、私たちを招かなければならない。イエスがここ44節で述べているように、神は私たちをイエスに引き寄せなければならないのだ。
 - d. そこで問題となるのは、神が私たちをイエスへと引き寄せることは、具体的にどのようなものなのかということだ。神はそれをどのように行うのか。さて、聖書は、それが聖霊の働きと関係があることを示唆しているようだ。
 - e. ヨハネによる福音書第16章は、聖霊の働きと奉仕とは、世に罪と義とさばきについて悟らせることであると教えている。（ヨハネ16:8）
 - f. 聖霊は私たちのそばに寄り添い、私たちに証しをしてくださる。すなわち、私たちに救い主が必要であることを示してく下さるのだ。聖霊は私たちの罪を指摘し、義の欠如、あるいは義への必要性を示し、裁きが迫っていることを教えてくださる。もし聖霊の働きと奉仕がなければ、私たちは罪の中に絶望的に迷い込んでしまうだろう。
3. しかし重要なのは、私たちには依然として、聖霊のその働きに応答する責任があるということだ。先週指摘したように、神は主権者であるとはいえ、私たちには神の働きに応答する責任があり、イエスのもとへ行き、その招きに応える責任があるのだ。
 - a. イエスは先週の37節の終わりで、「わたしのもてに来る者を、決して追い出さない」と言われた。（ヨハネ6:37b）
 - b. だから、私たちはイエスのもとに行かなければならない。イエスを信じなければならない。
 - c. 私たちは自分の選択に対して責任を問われることになる。聖霊の働きに応答するか否か、神が私たちをイエスへと引き寄せる声に耳を傾けるか否か、そのすべてにおいてだ。
4. イエスは今日の聖句の中で、父が引き寄せてくださらない限り、だれも父のもてに来ることはできないと述べ、また、御自身のもてに来る者は皆、終わりの日によみがえらされると約束してくださっている。
 - a. これは私たち自身の復活について語っている。コリントの信徒への手紙第一15章によれば、イエス・キリストは死者の中から復活し、復活の初穂となった。
 - b. パウロはこう書いている。「アダムにおいてすべての人が死ぬのと同様に、キリストにおいてすべての人が生かされる。しかし、それぞれが自分の順序に従って：キリストが初穂であり、

その後、キリストの来臨の際、キリストに属する者たち。そして、終わりが来る。すなわち、キリストが王国を父なる神に引き渡し、あらゆる支配、権威、力を滅ぼす時である。」（**コリント15:22-24**）

- C. これが、イエスがこの聖句で言及している「最後の日」である。パウロはコリントの信徒への手紙第一の中で次のように続けている。「見よ、私はあなたがたに奥義を告げる。私たちは皆、眠るわけではないが、皆、変えられるのだ——一瞬のうちに、目を開くほどの瞬きのように、最後のラッパの響きと共に。ラッパが鳴り響き、死者は朽ちないものとしてよみがえり、私たちは変えられるのだ。この朽ちるべきものは、朽ちないものをまとい、この死ぬべきものは、不死をまとうのだ。」（**コリント15:51-53**）

- d. いつの日か、私たちは栄光に満ちた体へと復活し、天国で神と共に永遠を過ごすことになる。イエスが復活されたのと同じように、私たちも終わりの日に復活するのだ。

C. イエスは、45節で語りかけていた宗教指導者たちに対して、痛烈な叱責を浴びせている。

1. イエスがイザヤ書54章13節を引用し、すべての人が神から教えられ、神の御声を聞き、父から学ぶ者は皆イエスのところに来ると語ったとき、イエスは本質的に、彼らには神の御声が聞こえておらず、神から何も学んでいないと告げているのだ。もしそうであったなら、彼らはイエスのところに来るはずだからである。
2. イエスのもとに来て、イエスを信じようとしないうという彼らの態度によって、宗教指導者たちは、自分たちが神の声を聞いておらず、神から何も学んでいないという単純な事実を露呈しているのだ。
3. イエスは基本的に彼らを非難しているのだ。彼らは本来、人々を神へと導くべき人々であり、人々に神を代表する者であるはずだが、イエスは、彼らが神の声を聞いておらず、神から教えられてもいないことを明らかにしている。もしそうであれば、彼らはイエスのところに来て、イエスを信じたはずだからだ。

D. イエスは、彼らが「神から来た者以外、だれも父を見たことがない。神から来た者だけが父を見たのだ」と言うとき、彼らがどのような反論や反応を示すかを予期している。

1. イエスは、彼らが父を見たことがないから父に応答していないという彼らの反論を予期しているのだ。ユダヤ人はしるしを求めることを好む。コリントの信徒への手紙第一1章22節は、「ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を追い求める」と証言している。（**1コリント1:22**）
2. イエスはヨハネの福音書第4章で、ユダヤ人について「しるしや不思議を見ない限り、決して信じない」と語った。（**ヨハネ4:48**）
3. 彼らは、神から遣わされたという主張の真实性を確かめるために、天からのしるしを見たいと願う。しかし、しるしを見たとしても、彼らは依然として信じようとしなかった。彼らはそれを単に一蹴するか、イエスが悪魔の力によって行ったのだと主張しただけだった。
4. イエスは要するにこう言っているのだ。「『父を見たことがない』などという、つまらない言い訳を私に持ち出すな。父を見た者は誰もいない。私以外には、誰もいないのだ。」
5. その後、イエスは弟子たちにこう証しする。「もしあなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父も知っていたはずだ。そして今からは、あなたがたは父を知っており、

見たのだ。」これに対し、フィリポは「主よ、父を見せてください。それだけで私たちには十分です」と答えた。イエスはこう言われた。「フィリポよ、これほど長い間、あなたがたと共にいたのに、まだわたしを知らないのか。わたしを見た者は父を見たのだ。それなのに、どうして『父を見せてください』などと言えるのか。わたしが父の中にあり、父がわたしの中にあることを信じないのか。」（**ヨハネ14:7-10a**）

6. イエスを見たなら、父を見たことになる。なぜなら、イエスは父の中にあり、父はイエスの中にあるからだ。だから、これらの人々には言い訳の余地はない。

E. イエスは、イエスを信じる者には永遠の命があると、極めて明確に述べている。先週の聖句の35節でそうであったように、イエスは再び、ご自身が「いのちのパン」であると主張する。

F. 続いてイエスは、荒野でマナを食べた昔の先祖たちの話を持ち出し、彼らが食べたマナと、イエスが与えるパンとを比較する。

1. 彼らが荒野で食べたマナは、ただ命を維持するためのものでしかなかった。命を与えることはできなかった。それは一時的なものにのみ焦点を当てており、永遠のものを対象としていなかった。そして、それはイスラエルの民の陣営にいる者たちのためだけのものであった。
2. イエスが与えようとしているパン、すなわち天からの真のパンは、単に命を維持するだけでなく、命を与えることができる。それは一時的なものではなく、永遠のものに焦点を当てている。そして、それは全世界のためのものである。イスラエルの子らだけのためでも、選ばれた者や少数の者だけのためでもなく、イエスのもとに来るすべての人々のためである。
3. イエスは、ご自身が与えるパンがご自身の肉であると語っている。これは、カルバリの十字架における御業を直接指している。そこでイエスは、自ら進んで命を捨て、私たちの罪のためのいけにえとしてご自身の体を捧げられるのだ。
4. 十字架上のイエスの死、すなわち御自身の肉を捧げられたことは、全世界のためであった。ヨハネの手紙第一2章2節には、「御自身こそ、私たちの罪のための贖いであり、私たちの罪のためだけにでなく、全世界のためでもある」と記されている。（**ヨハネの手紙第一2:2**）
5. 洗礼者ヨハネはイエスについて、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ！」と宣言した。（**ヨハネ1:29**）
6. これは、全世界が救われるという意味ではなく、全世界に救われる機会があるということだ。すなわち、「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のである。（**ローマ10:13**）
7. イエス・キリストの福音は全世界のためのものだ。それは西洋特有のものでも、アメリカ特有のものでもない。イエスの犠牲は、この世の誰であれ、イエスのもとに来ることを選び、自分の人生に働く聖霊の働きに応え、神に引き寄せられることに応える者すべてにとって、十分なものであった。

G. さて、ユダヤ人たちはイエスの言葉に快く思わなかった。今朝、本文の第二の節を見ていこう。すでに「ユダヤ人たちの不平」については見てきたが、今度は「ユダヤ人たちの論争」に注目しよう。次の節に入るにあたり、52節を見てみよう。

V. ヨハネ6:52；争いの理由

A. ここ52節では、ユダヤ人たちが互いに言い争い始めた様子が記されている。

1. 「口論した」という言葉は、言葉による言い争いを表す描写的な言葉だ。彼らは互いに言い争っていたのだ。あなたの訳本には「互いに議論した」とか「互いに言い争い始めた」と書かれているかもしれないが、単なる意見の相違にとどまらず、一部の訳本では「互いに激しく言い争った」と記されている。
 2. 彼らが互いに言い争っていたという事実は、イエスとその言葉を受け入れる者もいれば、イエスの説くことに完全に反対する者もいたことを示唆している。そうでなければ、議論など起きなかったはずだ。
- B. そして、彼らが口論した理由は、イエスが「自分の肉を食べさせる」と語ったことに関するものであった。
1. 本文と文脈から明らかなように、イエスは比喩的に語っている。象徴的に語っているのだ。イエスはご自身をパン、すなわち天からのパン、命のパン、神によって遣わされた真のパンに例えている。ご自身の肉がそのパンであると語るときも、依然として象徴的に語っているのだ。
 2. しかし、群衆の中には、イエスが何らかの人食いの儀式を提案しているのだと誤解し、その言葉を文字通りに受け取っている者もいたようだ。それはまったくもって荒唐無稽なことだ。
 - a. しかし、これは彼らが真理に対してどれほど盲目であったかを如実に示している。これらの人々は、真理以外の何であれ、喜んで受け入れてしまったのだ。
 - b. 彼らには霊的な識別力が欠けていた。当時の宗教指導者たちであったことを考えると、それは悲しいことだ。
 3. パウロは、多くの人が苦しんでいるこの霊的な盲目さについて書いている。彼はコリントの信徒への手紙第一2章で、「肉に生きる人は、神の御霊のことは受け入れない。それは、その人にとっては愚かなことだからである。また、それを知ることさえできない。それは霊的にしか見分けられないからである」と記している。（コリントの信徒への手紙第一2:14）
 4. これらの宗教指導者たちは、宗教や人の伝統ばかりにこだわっていたが、イエスが語っていたことを理解するために必要な霊的な識別力を欠いていた。
 - a. 彼らには宗教はあったが、関係はなかった。彼らは主についても、主の御業についても何も知らなかったのだ。
 - b. 霊的な識別力は、神の御霊が私たちを導き、導いてくださることに由来する。それは、御霊が私たちの内に住まれる結果として与えられるものだ。
 - c. 私たちがイエスを信じるようになると、神の御霊が私たちの内に住まれ、絶えず私たちを導き、イエスへと向かわせてくださる。
 - d. 私たちの霊的な識別力は、神との絶え間ない関係に基づいている。神と共に歩むほど、神から多くを学ぶ。神の中で成長すればするほど、神の声を聞き分け、私たちの人生における神の御心を知ることを学ぶのだ。
 - e. 私たちは、関係よりも宗教に囚われていたイエスの時代のこれらの宗教指導者たちのようには決してなりたくない。彼らは、目の前にあるものさえ見ることができないほど盲目だったのだ。
- C. 53～58節にある、ユダヤ人たちの論争に対するイエスの応答を見てみよう。

VI. ヨハネ6:53-58；論争への応答

- A. ここでのイエスの応答において、イエスは彼らに分かりやすく説明しようとはせず、むしろ「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたにはいのちがない」と、さらに強く主張している。
1. 繰り返しになるが、イエスは比喩的に語っているのだ。彼は霊的な真理を象徴的に語っているのだ。
 2. イエスが御自身の肉を食べ、御血を飲むと語るのは、少々衝撃的な発言ではあるが、彼らにとって全く馴染みのない話というわけではない。
 - a. イエスが文字通りの意味で語っていたわけではないことは明らかだ。
 - b. 神の律法は、いかなる血の摂取も禁じている。レビ記17章にはこう記されている。「イスラエルの家の人、あるいはあなたがたのうちに住む寄留人で、いかなる血でも食べる者があれば、わたしは血を食べるその者に顔を向け、その者を民の中から断ち切る。「肉の命は血にある。わたしはあなたがたの魂の贖いのために、それを祭壇の上であなたがたに与えた。血こそが魂の贖いとなるからである。」（レビ記17:10-11）
 - c. したがって、イエスが神の完全な律法に反することを示唆していたわけではないことは明らかだ。
- B. では、「その肉を食べ、その血を飲む」とはどういう意味なのか。そして、そうしなければ私たちの中に命がないとはどういうことなのか。
1. さて、イエスはすでに、命は御自身を信じることに由来することを明らかにしている。この箇所の前の47節で、イエスはこう述べている。「まことに、まことに、あなたがたに告げる。わたしを信じる者は、永遠の命を持つ。」
 2. 先週の聖句の40節では、イエスは「御子を見て、彼を信じる者はだれでも、永遠の命を持つ」と述べている。
 3. つまり、命、すなわち永遠の命は、イエスへの信仰によってもたらされることが分かる。それは、イエスを信じることで得られるのだ。
 4. したがって、文脈全体から最も基本的な理解として、イエスの肉と血を「食べる」とは、イエスを信じることについて語っているのだと読み取れる。
- C. しかし、ここにはさらに深い意味がある。イエスはまた、ご自身が与えてくださるすべてのものを受け入れ、ご自身そのものを私たちの中に取り込むことについても語っているのだ。
1. イエスは、当時のよく知られた慣習を取り上げ、それを御自身と一つになることに関連付けているのだ。
 - a. ご存知のように、イエスの時代、誰かと一緒に席に着いて食事を共にすることは、非常に親密で特別な機会だった。
 - b. ほとんどの食事は、パンと何らかの肉、そして一緒に食事をする全員が共有するディップソースの入った器で構成されていた。
 - c. そして、二度つけに関するルールなど一切なかった。だから、パンを手に取り、器に浸して食べる。それからまた浸して、さらに食べる。食卓を囲む他の皆も、同じ器にパンを浸し、互いに自由に分かち合っていたのだ。

- d. その考え方は、誰かと一緒に座って食事を分かち合うことが、その人と一つになる方法だということだ。なぜなら、相手があなたの細菌を取り込むのと同様に、あなたも文字通り相手の細菌を取り込んでいるからだ。あなたは自分の人生を相手と分かち合い、相手はそれ自分の中に取り込み、あなたがそれを自分の中に取り込むのと同様に、相手もまた自分の人生をあなたと分かち合っているのだ。
- e. 相手が食べている食べ物、その人自身の一部となる。そして、二人は特別な絆で結ばれるのだ。
- i. 実はこれが、ユダヤ人が異邦人と一緒に座って食事をしなかった主な理由の一つだ。彼らは、同じ器から共に食べることで、異邦人と結びつけられることを望まなかったのだ。

2. イエスがご自身の肉と血を「受ける」と語るとき、それは共に食事を分かち合うことにまつわる比喩を用いているのだ。イエスが差し出すものを受け入れ、それを自分の一部となるように許すことである。
- a. だからこそ、56節で「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしの中に住み、わたしもその人の中に住む」と語っているのだ。イエスを受け入れるとき、あなたはイエスを自分の人生に迎え入れ、イエスはあなたの一部となっていくのである。
 - b. 主はあなたの中に住み、あなたは主の中に住む。ここでもまた、私たちは「関係」という概念に立ち返ることになる。イエスに与るということは、たくさんの規則や規定に従うのではなく、イエスを自分の人生に迎え入れ、イエスと一つになることだ。そこで、あなたはイエスの中に自分のアイデンティティを見出すのだ。
 - c. イエスは単に日曜日の朝に礼拝する対象ではなく、あなたの人生そのものであり、あなたの毎日の生活において不可欠で密接に絡み合った存在だ。あなたとイエスは切り離せない関係にあり、互いに一つとなっている。

D. しかし、ここにはさらに注目すべき点があり、英語では見過ごされがちな部分だ。

- 1. 53節で、イエスは「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに命はない」と語っている。
- 2. 「食べる」と訳されているその言葉は、ギリシャ語の動詞「ファゴ (*phago*)」であり、アオリスト時制で書かれている。これは、動詞の行為が「一瞬の出来事」であることを示している。一度きりの出来事だ。
- a. これは、50節、51節、52節、53節でも使われているのと同じ動詞だ。これらはすべて、天からのパンを食べ、イエスの肉を食べるという、単純な一度限りの出来事を指している。
- b. これは、イエスを信じ、永遠の命を受けることが、あなたの人生における一度きりの「一瞬の出来事」に基づいているという事実を示している。
- c. 今日ここにいる信者であれば、自分の人生を振り返り、イエス・キリストを信じた瞬間、すなわち信仰によってイエスに与った瞬間を、自分自身で思い起こすことができるはずだ。
- d. 私たちは何度も救われる必要はない。私たちは一度きりで永遠に救われているのだ。私たちの救いは確固たるものである。

E. しかし、54節、56節、57節、58節では、非常に興味深いことが起きている。

1. ギリシャ語の動詞に変化が見られる。英語では両方の単語が「食べる」と訳されているため気づかないが、実際にはギリシャ語では二つの異なる単語が使われている。
 - a. ESV訳は、これらの節で「食べる」の代わりに「養われる」という語を用いて両者の区別を図っているが、他のほとんどの現代英語訳では、両方の語に単に「食べる」という訳語を用いている。
2. では、その違いは何だろうか。54、56、57、58節にある言葉は、ギリシャ語の動詞「トロゴ (trogo)」だ。ギリシャ語の「トロゴ」は、単に何かを食べて体内に取り込むだけでなく、口の中で何かを噛みしめたり、かじったり、何度も何度も噛み砕いたりすることを表す場合によく使われる。
3. また、動詞の時制も異なる。以前はアオリスト形で書かれていたのに対し、これらの節では現在形で書かれている。これは一瞬の出来事を表すのではなく、その行為の完了を判断することなく、継続している出来事を指しているのだ。
4. これは非常に興味深い。イエスは当初、「パンを食べよ、わたしの肉を食べよ」と、人生における一度きりの出来事として語っていた。
5. しかしその後、イエスは別の動詞へと切り替え、私たちが絶えずイエスを噛みしめ、かじり続けなければならないと説明している。
6. これは、**絶えず**イエスを味わうことの必要性を語っているのだと私は受け止めている。絶えずイエスのもとへ行き、何度も何度もイエスを味わうことだ。
 - a. イエスは私たちに一度きりの永遠の命を与えてくださるが、同時に、絶えず御元に近づき、御身を糧とするよう招いておられるのだ。日々の生活を切り抜けるための糧と力を、御身に求めるよう招いているのだ。
 - b. イエスは私たちを救い、永遠の命を与えてくださるが、同時に私たちを支え、この世の生涯を導いてくださる。イエスとの関係は、継続的な関係であるべきであり、いつの日か私たちをイエスと共に天国へと導く、絶え間ない信仰と信頼である。
7. イエスを信じるということは、振り返ることができる人生における一度きりの出来事であると同時に、日々イエスに従い、日々の必要をイエスに求めることでもある。それは、イエスにとどまり、イエスを通して、そしてイエスのために生き、イエスが与えてくださる恵みによって、イエスに誉れと栄光をもたらすことなのだ。
8. アーメン？ アーメン。祈ろう。